

【漁況】 【マアジ】

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成18年は16万7千トンとなりました。

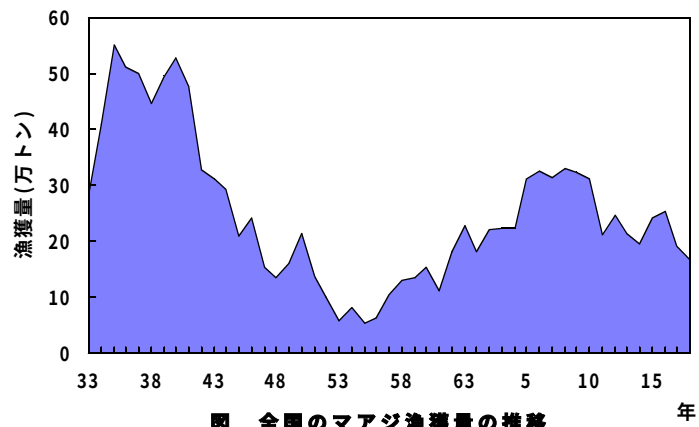


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 平成20年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甕島西、串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、野間岬沖、立目崎沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ豆・マアジ小（1歳魚：平成19年生まれ）主体に570トンの水揚げで、前年の129%及び平年の75%でした。

3. 平成20年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ仔、マアジ豆（0歳魚：平成20年生まれ）で、マアジ小（1歳魚：平成19年生まれ）も漁獲されるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、現在までの定置網やまき網での漁獲状況から、低調であった前年・平年を上回ると考えられます。マアジ1歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みで平年を下回ると考えられます。

総合的に判断すると、前年・平年を上回ると考えられます。

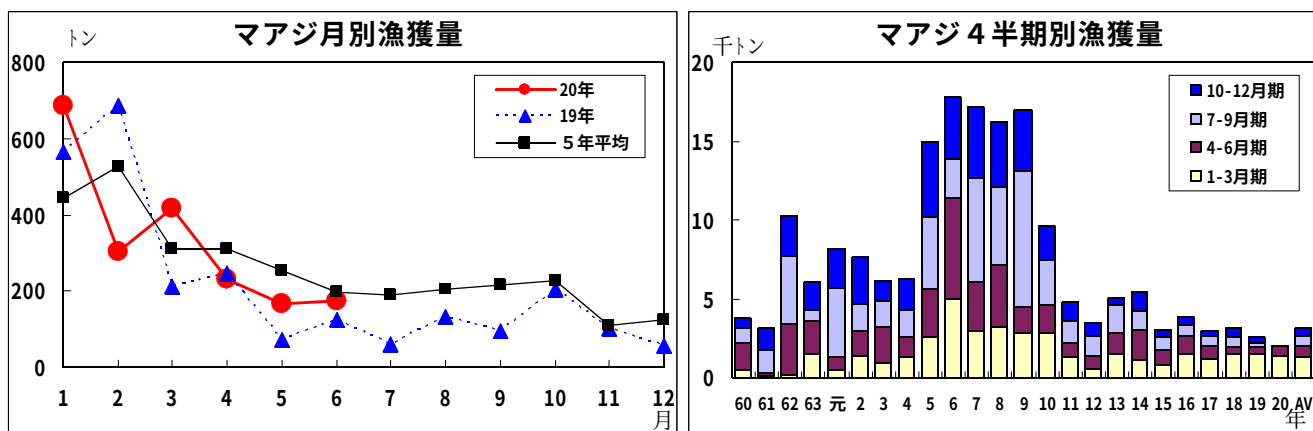


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、6月は平成20年6月25日までの水揚量を使用。

[サバ類]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンとなりました。平成17年から再び増加し平成18年には65万2千トンとなりました。

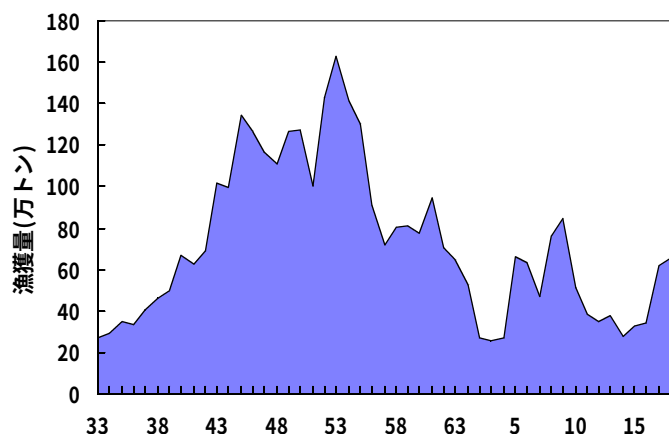


図 全国のサバ類漁獲量の推移 年

2. 平成20年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域には、漁場が形成されませんでした。

薩南海域では、種子島東、馬毛島沖、黒島沖に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ中(4歳魚・3歳魚：平成16年生まれ・平成17年生まれ)主体に2,496トンの水揚げで、前年の42%及び平年の57%と非常に低調に推移しました。

3. 平成20年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ仔・豆（0歳魚：平成20年生まれ）及びゴマサバ中・大(3歳魚・4歳魚：平成17年生まれ・平成16年生まれ)となるでしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

今期における本来の漁獲主体はゴマサバ1歳魚・2歳魚ですが、これらの年級群はこれまでほとんど漁獲されていないことから、まとまった来遊は期待できません。ゴマサバ0歳魚はすでにまき網に混獲されていることから、前年を上回る来遊が期待されます。ゴマサバ3歳魚・4歳魚は、これまで漁獲の主体となってきたことから、今後も散発的な来遊が期待されます。

総合的に判断して、前年・平年を下回ると考えられます。

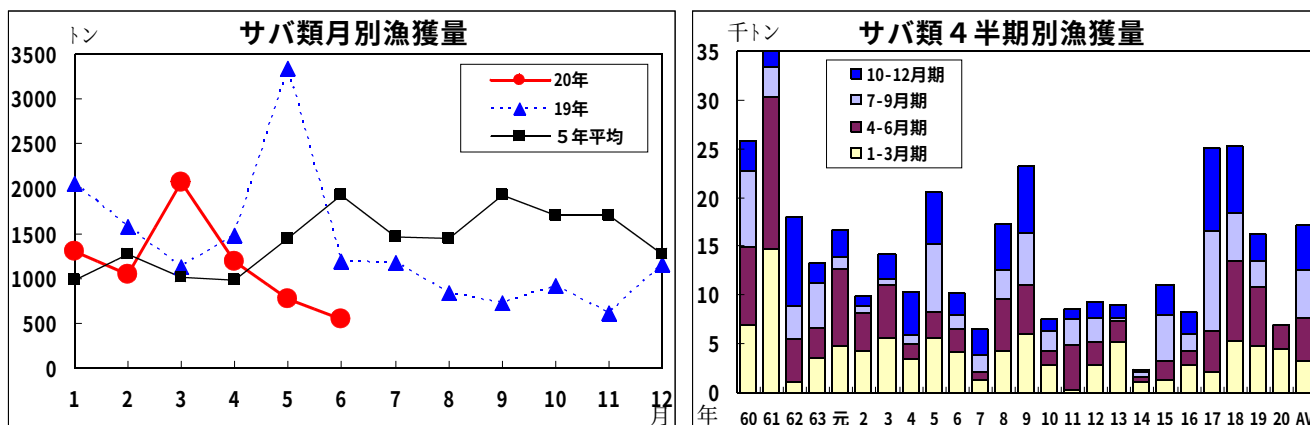


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、6月は平成20年6月25日までの水揚げ量を使用。

[マルアジ（アオアジ）]

1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、19年は654トンとなりました。

2. 平成20年4～6月期の漁況の経過

今期は、まとまった漁獲はなく、期全体で14.8トンの水揚げで、前年の8%及び平年の7%でした。

3. 平成20年7～9月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小（1歳魚：平成19年生まれ）、マルアジ中・大（2歳魚以上）で9月以降はマルアジ豆（0歳魚：平成20年生まれ）も漁獲されるでしょう。

来遊量は前年、平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ小（1歳魚）は、前期までの漁況経過から、来遊量は前年、平年を下回る水準です。

マルアジ中・大（2歳魚以上）の来遊量も、前年・平年を下回る水準です。

総合的に判断して、前年、平年を下回ると考えられます。

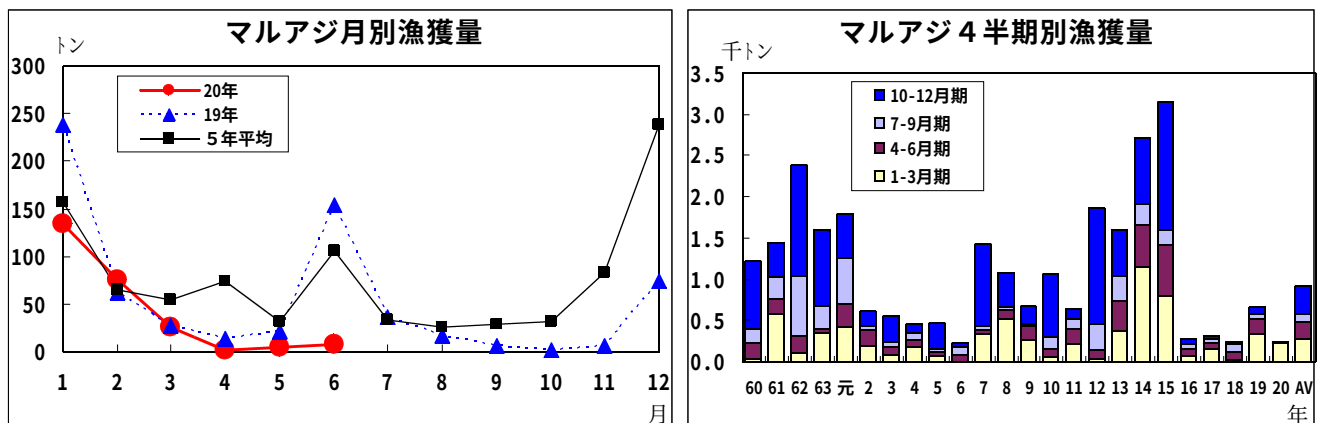


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，6月は平成20年6月25日までの水揚げ量を使用。

[マイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成18年は5万3千トンでした。

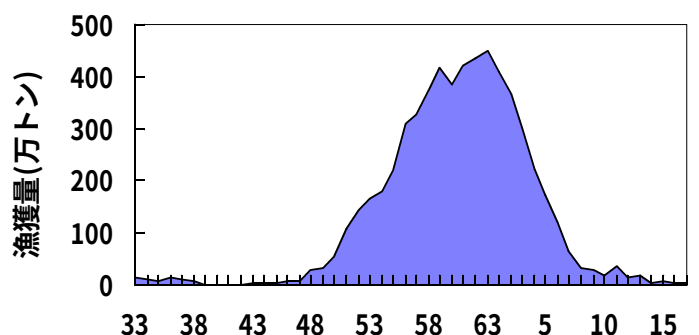


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 平成20年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

まとまった来遊は見られず、鹿児島県4港のまき網で3.6トン(前年比0.3%，平成比1.6%)と前年・平成とも大きく下回りました。北薩海域の棒受網でも1.8トン(前年比8%，平成比36%)と、前年・平成を大きく下回りました。

3. 平成20年7～9月期の見とおし

散発的な来遊にとどまり、前年・平成を下回るでしょう。

(根 拠)

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあり、また昨年春季に見られた1,2歳魚の鹿児島県海域への来遊が見られなかったことから、散発的な来遊にとどまると考えられます。

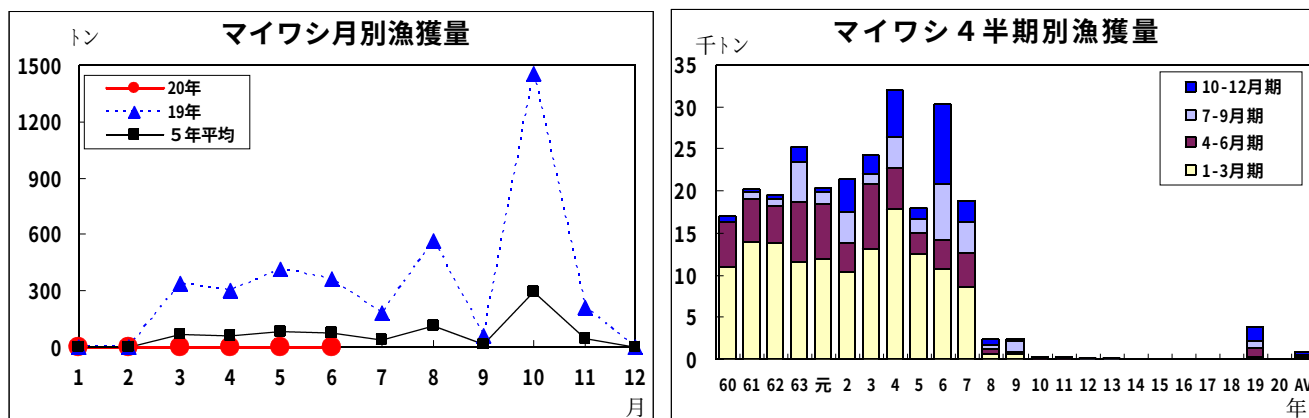


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平成値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年6月25日までの水揚量を使用。

[ウルメイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが、昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降、漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが、その後、増減を繰り返しながら、増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ、平成12年は2万4千トン、平成18年は3万8千トンでした。

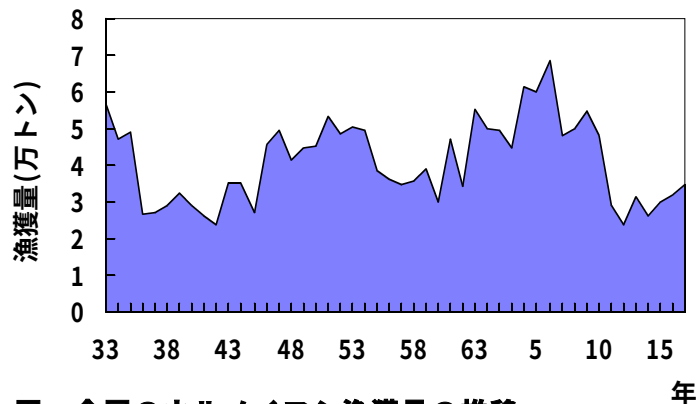


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 平成20年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で287.1トン(前年比18%，平年比53%)と，前年・平年を下回りました。北薩海域の棒受網でも48.9トン(前年比38%，平年比36%)と，前年・平年を下回りました。

3. 平成20年7～9月期の見とおし

まき網・北薩海域の棒受網とも小～中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。前年・平年を下回り，低調に推移するでしょう。

(根 拠)

昨年春期に見られた1・2歳魚の来遊が今年は見られなかったことから，今期漁獲の主体となる(0歳魚・平成20年生まれ)の新規加入量も少なく，来遊水準は低いと考えられます。

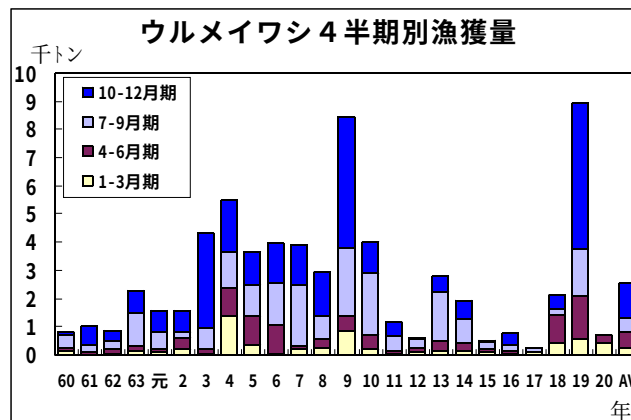
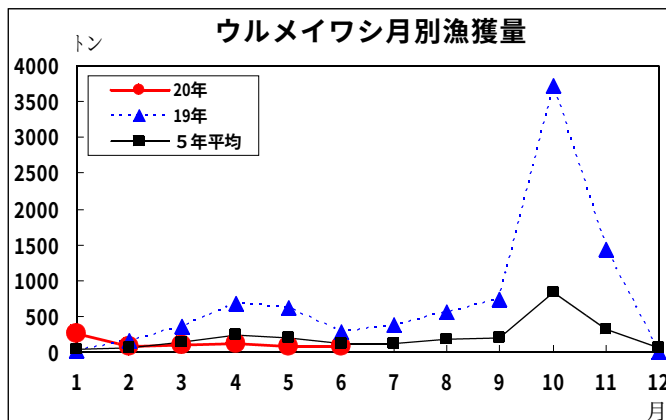


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年6月25日までの水揚量を使用。

[カタクチイワシ]

1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、その後再び減少し、平成18年は41万5千トンとなりました。

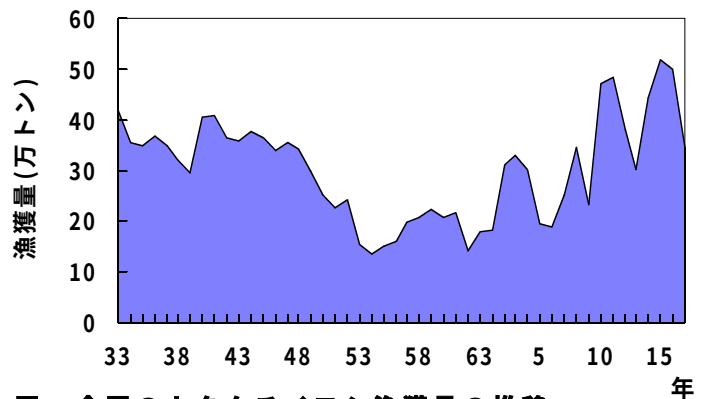


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 平成20年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で820.2トン(前年比241%, 平年比359%)の水揚げで、前年・平年とも大きく上回りました。北薩海域の棒受網では187トン（前年比66%, 平年比67%）の水揚げで、前年・平年を下回りました。

まき網では中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ)を主体に好調に推移しています。

3. 平成20年7～9月期の見とおし

期間の前半は中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ)が主体で、後半は小～中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となり、前年・平年を上回るでしょう。

(根 拠)

中～大羽銘柄(1歳魚・平成19年生まれ)の来遊量が好調に推移しており、来遊水準は高いと考えられます。

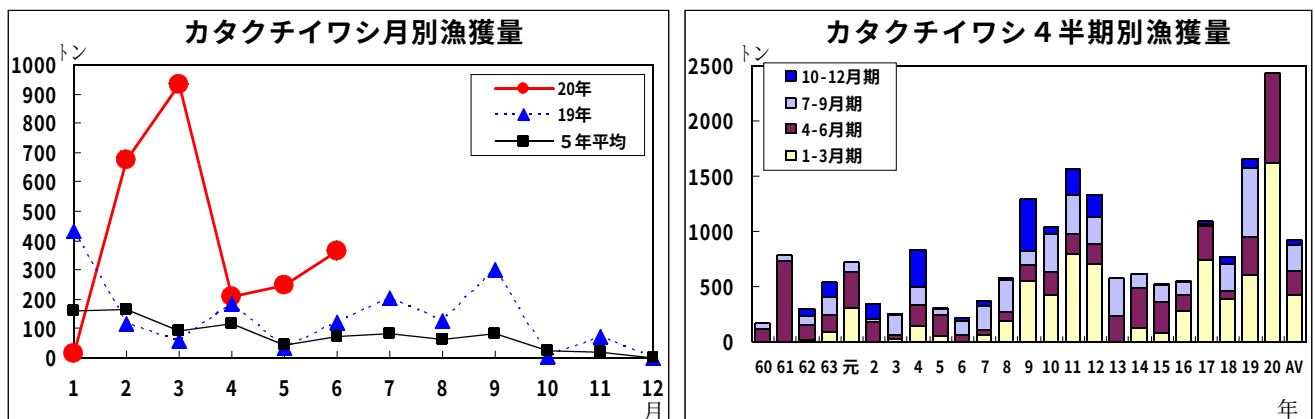


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年6月25日までの水揚量を使用。

[シラス]

経年経過及び平成20年4～5月期の漁況の経過

平成11年以降のバッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の5,450トンにピークに減少し、平成14、15年は1,000トンを下回り低調に推移しました。その後平成16年は3,507トンと比較的好調でしたが、その後減少傾向を示し、平成19年は2,470トンとなりました。

志布志湾海域では平成12年の1,407トンにピークに減少し、平成14年は396トンまで減少しましたが、平成15年以降は増加傾向を示し、平成19年は2,374トンと好調に推移しました。

今期の西薩海域ではカタクチシラス主体に1,088.9トンの水揚げで、前年の73%、平年の94%と前年を下回り、平年並みとなりました。志布志湾海域ではカタクチシラス主体に178.7トンの水揚げで、前年の22%、平年の37%と前年・平年を大きく下回りました。

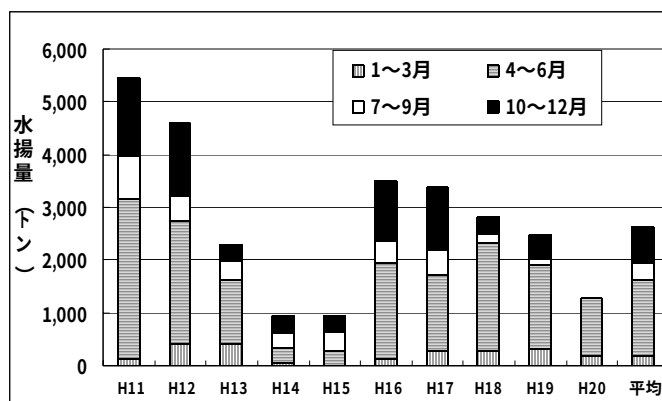
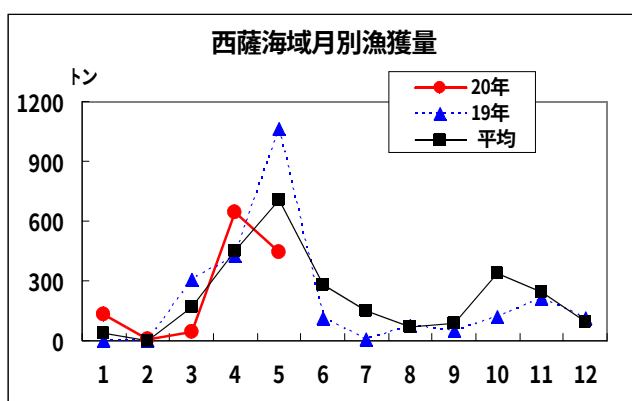


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

※平成20年5月末までの水揚げ量を使用。

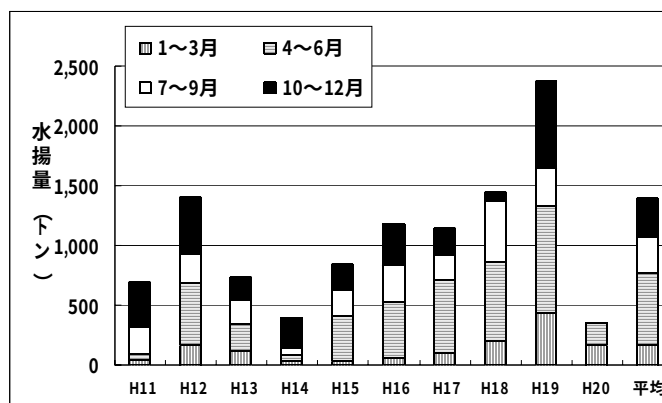
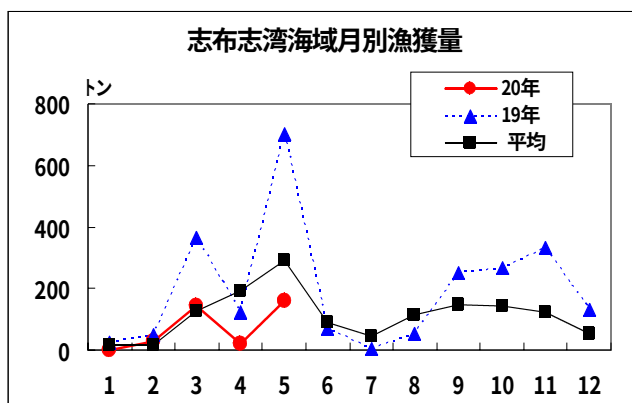


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

※平成20年5月末までの水揚げ量を使用。

[イワシ類参考資料]

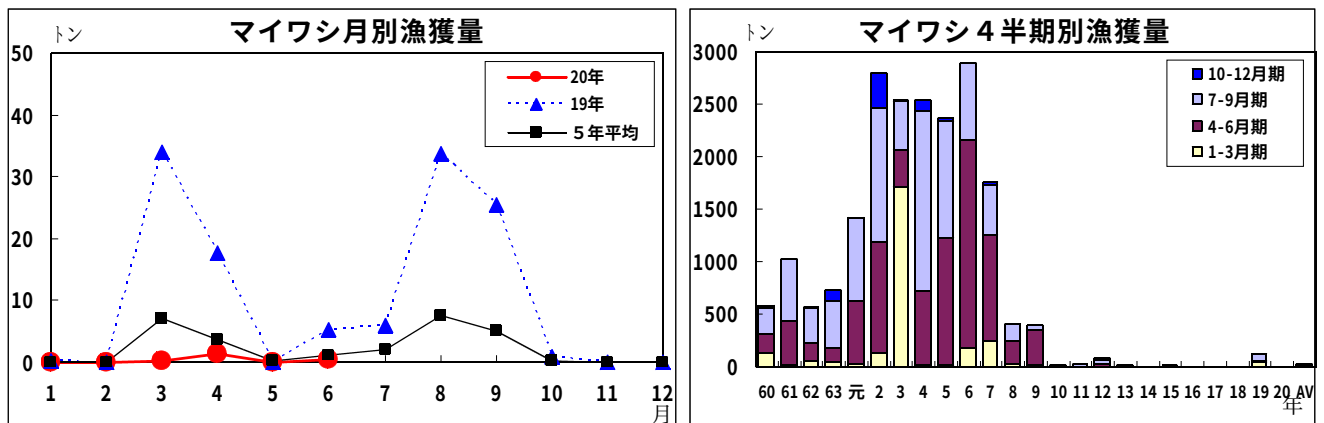


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

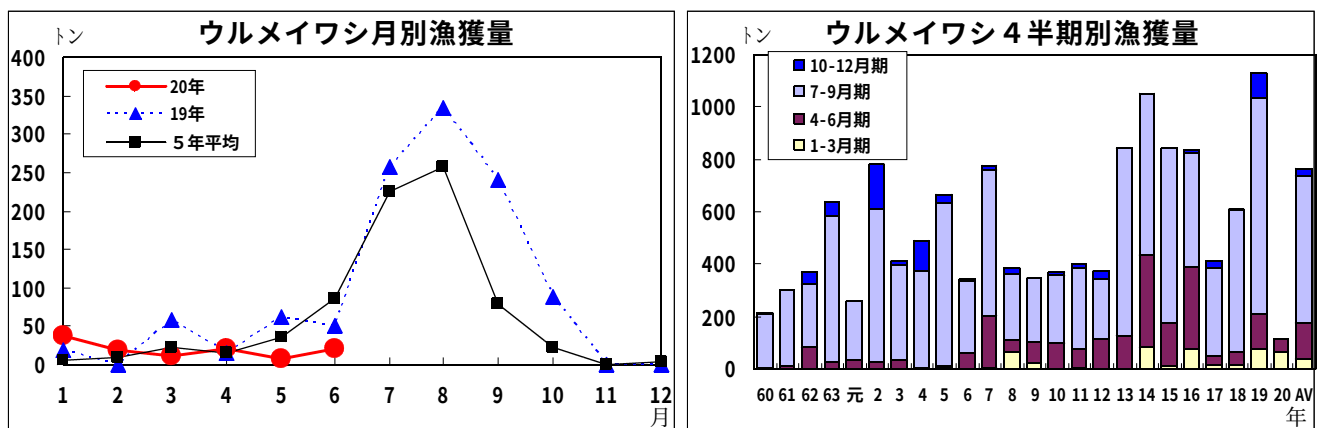


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

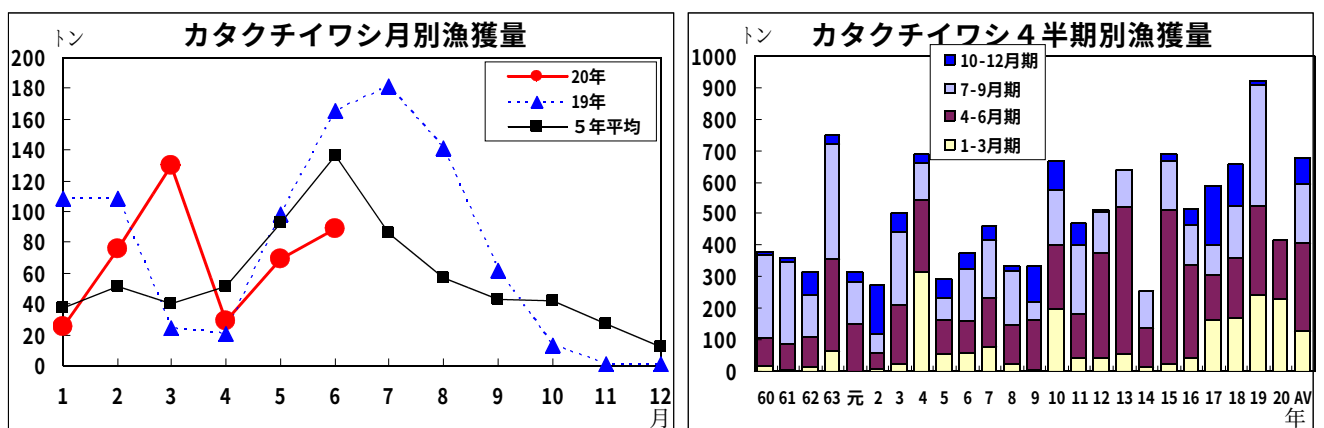


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

※ 平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，6月は平成20年6月25日までの水揚量を使用。

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（4港計）〉

1. 経年変化及び平成20年4～6月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トン进行ピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成19年は18年より若干増加し2,655トンとなりました。

平成20年4～6月は、薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体の漁獲があり、期全体では83トンの水揚げで、前年の131%及び平年の72%でした。

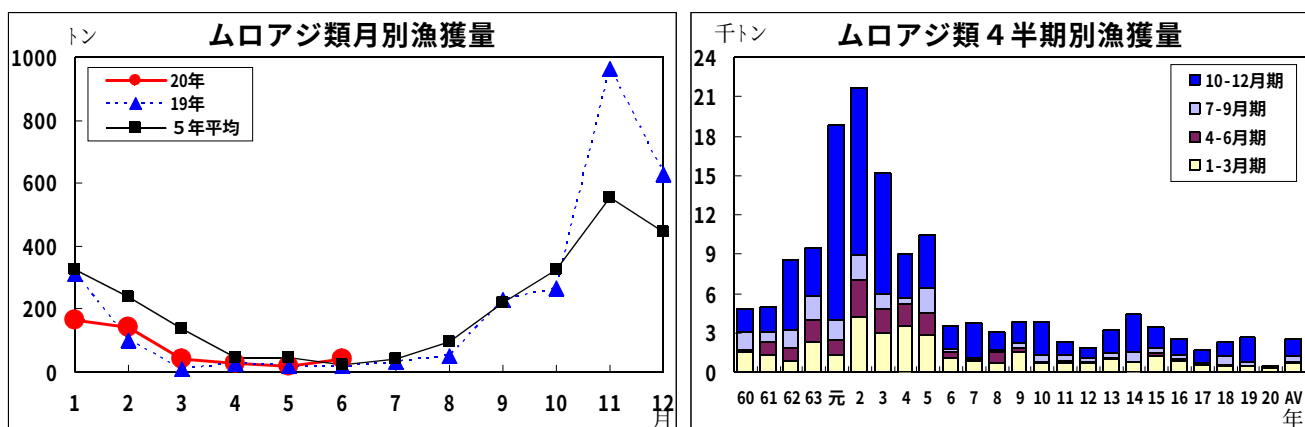


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

〈オアカムロ（4港計）〉

1. 経年変化及び平成20年4～6月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トン进行ピークに一端減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり、平成19年は昭和60年以降最低の714トンとなりました。

平成20年4～6月は、主に薩南海域で漁獲があり、期全体では91トンの水揚げで前年の62%及び平年の33%でした。

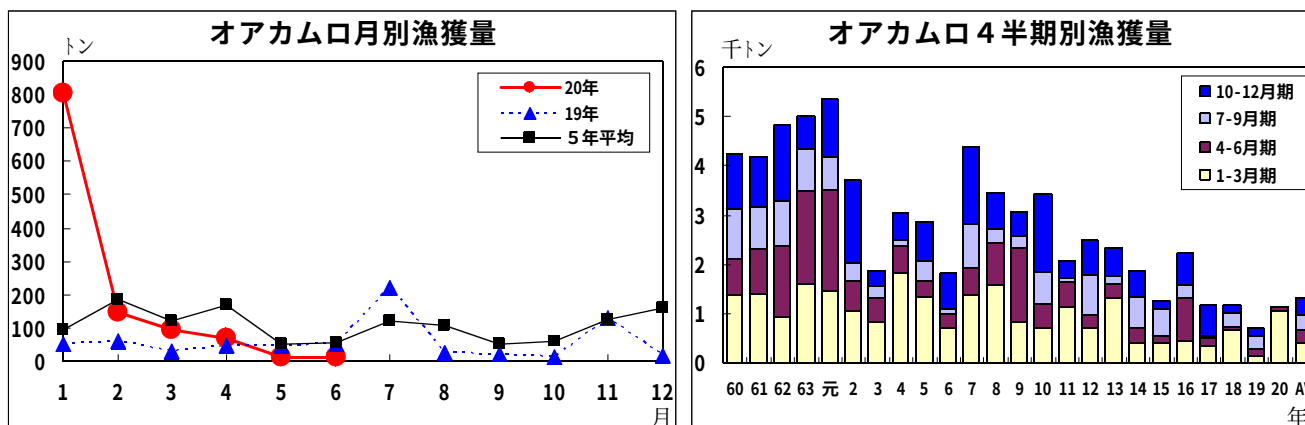


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※ 平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値、6月は平成20年6月25日までの水揚げ量を使用。